國學院大學学術情報リポジトリ

資料解題　國學院大學図書館「宮地直一コレクション（和装本）」解題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001503

國學院大學図書館「宮地直一コレクション（和装本）」解題

解題作成の経緯と趣旨

研究開発推進センターでは、令和四（二〇二二）年度より研究事業「神道・日本文化の先端的研究」を推進している。本事業はこれまで本機構が実施してきた神道・日本文化の研究をさらに発展させ、「新たな国学的研究による拠点機能の拡充」を目指していくつかの柱を立て、研究会の運営、成果の刊行、基礎資料の作成など、具体的プロジェクトをもって構成するが、その柱（目的）の一つに「神道・日本文化関係資料の調査・保存・活用」がある。

その達成のため、昨年度より本学図書館所蔵の近代神社社格昇格関係資料類の整理・リスト化プロジェクトを進めているが、本年度は、これに加えて、本学が所蔵する他の神道関連資料にも目を向け、調査を行うこととした。とは言え、本学所蔵資料と一口に述べてもそれは多種多様かつ膨大であるため、今年度は「宮地直一コレクション（和装本）」という資料群に照準を合わせ、これを調査し、その概略を発信し、もってその活用を促すプロジェクトを立ち上げることとした。

宮地直一博士（明治十九（一八八六）年～昭和二十四（一九四九）年）は、東京帝国大学文科大学卒業後は内務省神社局において戦前の神社・神道行政に中心的人物として携わるとともに、研究者として神道学・神道史学に関する

多くの研究成果を残し、本学においても教鞭を執った、近代神道学研究の礎を築いた泰斗である。そして、没後、博士の収蔵にかかる数多くの資料がその子孫へ受け継がれ、それらに対して平成十四（二〇〇二）年から同十五年にかけて本学の研究グループが宮地邸において調査を実施する機会を得た。さらにその後、それらが「宮地直一コレクション」として一括して本学へ寄贈される運びとなったもので、その内容は和装本や洋装本、写真帳、自筆原稿などの文献資料のみならず、神像や天神人形、絵馬など多岐にわたる。このうち写真資料については、平成十一年度に日本文化研究所が中心となって文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業指定を受けた学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクトにおいて整理と調査が進められた。また、和装本コレクションについては、平成十九年度に文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選定された「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業において調査・整理が進められ、目録が作成されている。さらに、それに併せて、洋装本の一部、自筆原稿類、天神人形、掛け軸類については学術資料センター（神道資料館部門）が引き続き整理を行い、成果がまとめられてきているところである。

このように、寄贈を受けてよりおよそ二十年の時の中で、「宮地博士コレクション」は着々と整理や調査、研究が進められてきている。しかし、その一方で、近代神道学の泰斗が集め残したコレクションであるものの、神道研究において多くの関連研究者が着目して利活用が盛んになされている、とは言い難い状況にあるというのも実際のところである。

そこで、「神道・日本文化の先端的研究」を推進する本センターとして、事業の目的に照らし、神道研究者として自分たちが身を置く本学に収められているこの「宮地直一コレクション」（和装本）という貴重な資料に着目し、それらを調査し、その知り得た成果を公にして、神道研究のさらなる隆盛を期することを企図したのが本プロジェクトであり、本センター事業担当の専任教員・研究員がコレクションの調査を行い、解説の作成を試みるものである。と

はいえ、中世の写本から近代の活字本、あるいは宮地博士による写本（透き写し本）など、和装本といってもその内実は多様であり、かつそれが三五〇〇点を超えることからも、すべてを悉皆的に調査し、それぞれの解説を作成するというのは、俄かには不可能である。そこで、本事業では、担当者が個々の専攻分野に基づく視点から、（1）「善本」と言いうるもの、（2）善本とは言い難いが、神道研究に裨益すると考えられるもの、を各自が選定して、それらについて基本的な書誌事項や概略、すなわち略解題を執筆し、本紀要においてそれらを公開して、コレクションの一斑を世に紹介することとしたい。

さらに、今後の展望として、こうした本学所蔵の資料・史料を媒として、学術資料センター（神道資料館部門）や校史・学術資産研究センター、國學院大學博物館等の本機構内の各機関、さらには図書館との協働・連携を一層深めながら、「國學院大學ならでは」の研究事業を推進・展開し、より多様な形で成果を公開していければと考えている。

（新井大祐）

【凡例】

（1）本解題は、國學院大學図書館宮地直一コレクション収蔵の和装本の一部について解説を加えたものである。

（2）本解題は、國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター事業「神道・日本文化の先端的研究」における令和五年度の成果の一部である。

（3）見出し書名は『宮地直一コレクション 和装本目録』の書名に従った。

（4）各項の掲載の順序は『宮地直一コレクション 和装本目録』における通し番号（見出し〈　〉内の漢数字）に従った。

（5）掲載事項は書名、形態（刊写の別、体裁、数量、丁数・紙数）、法量、識語・奥書（ある場合のみ）、概要、参

考文献を基本とした。

（6）識語・奥書、目録、本文等の引用にあたっては、原則として漢字は新字体に、仮名等は通行の文字に改めた。ただし、一部、原典の趣意に沿って元のまま示した部分がある。

（7）各項末に担当者名を付した。

新井…新井大祐（研究開発推進センター准教授）

大貫…大貫大樹（金沢工業大学助教、本学兼任講師、元研究開発推進センターＰＤ研究員（二〇二二年四月～二〇二三年七月））

※宮地直一コレクションについては、以下の文献を参照されたい。

・『宮地直一博士写真資料目録』

（國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト編、國學院大學日本文化研究所刊、二〇〇五年）

・『天神像―天神さまと天神人形―』

（白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、國學院大學学術フロンティア事業実行委員会編、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館刊、二〇〇五年）

・大東敬明「宮地直一の事績と宮地直一コレクション」

（『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践（文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業成果論集）』、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター編・刊、二〇一二年）

■『橘家神代巻解説』（B7・2〈三八五〉）

【書名】外題…橘家神代解説　上下
内題…日本書紀　橘家伝来講説

【形態】写本、冊子、一冊、二七丁

【法量】縦二七・五糎。横二〇・四糎。

【奥書】右玉木霊翁橘家伝来之解説而菅集之所筆禄甚潦草忽略恐其語意抑揚之間不記得諠旨者哉有之古未無差謬然
今不可漫筆削則始説本録吕山々入之其取改正者特之乎者也已如彼徒腴義膚説味雋永鶏肋旨必弓潮筒老一人
齬然咀嚙吕教之云爾享保癸丑之云成仲夏日　津野村谷川清識

【概要】

玉木正英による橘家神道流の神代巻講義を高弟谷川士清が筆録したものである。垂加神道の解釈に合わせて、講義の中には「橘家ハ」云々の如く、橘家の解釈を強調する記事が散見される。以下に列挙しよう。

①「一書曰古国稚云々油沸〳〵トシテ卵黄ノ堅ラヌカラ云ソ夫デ猶浮膏而漂蕩ト云常ノ説ハ水中ニ浮ンデ膏ノ如クニ土ガ出来ト云橘家ハ左ニ非人体全体油沸〳〵トシテ鶏卵ノ黄トナル如ク不凝渇油沸〳〵ンタル水ノ場ハ水中主ト云土凝堅テ国常立尊也御中主ノ中主カラ国常ヘニ立ツ」

②「一書曰天神云々…大元ノ神（筆者註―国常立尊）カラ付ラレタ国号ソ自然ノ名誰名付タト云レヌ其故日月カ此国土ヲ巡リ万国ノ中テ自凝島ソ国柱トシ玉ヘリ此ハ橘家ノ伝ニ非ス思出ス故云ソ…」

③「一書曰伊弉諾尊云々橘家ノ弁異フソ国土経営アレトモ未タ開闢ヨリ間ナキユヘ土地ニ水気多ク雲霧ト成テ水煙ノ様ニ山谷ノ間ニユヱ覆フ其レヲ開明（ハッキリ）ト為ント思召テ吹撥ヒナサル、フウト云息ガ動々ト大風ニナツテ朝雲（キリ）

ヲ撥ヒ逐ルコトソ…吹撥フ気ハ土金凝縮マラネバ出ヌ物ソ故ニ風神ヲ龍田ニ祭リテ天柱国柱ト云タ者ソ胸ノ上デ吹ハ天柱臍下デ吹ハ国柱ソ飢時ハ彼尊ノ飢デナイ天下万民ヲ以御主ノ上ト思召テソ其飢ヲ可レ救ト思召テ倉稲魂ヲ生玉フ是橘家ノ伝ソ万民ノ飢ヌヤウニナサレタキ思召ノ御神霊ガ直ニ倉稲魂ゾ」

④「是之後素戔嗚尊云々…日神ノ新嘗神衣ノ祭シ玉ハネハ天日光ヲ失ヒ天下恒闇トナルコト案ノ如シ此橘家ノ正説也」

⑤「一書曰是後日神云々天兒屋命掌其解除云〳〵此ニ橘家大事至切ノ訣有是中臣祓四神ノ根源ソ」

⑥「一書曰火酢兒芽云々…橘家ハ吹払気為レ神ト云ノ合点テ風ト云ト風起ル本天人唯一ユヘソ風神ヲ祭ルコトソ今風吹時屋ニ乗リ呼号ト風劣ル者ソ其此方カラ叫吟声ニテ豊玉彦カラ屹ト風吹来ソ瀛風辺風ハ瀛カラ吹風迄カラ吹来風ソ橘家塩会ノ伝ト云」

これらは垂加神道と橘家神道との間にある神代巻解釈の異同を概観する事が出来る記事であろう。橘家の解釈をかくも強調する点は、玉木正英が抱く道統者としての自覚をよく窺わしめるものである。（大貫）

■『神代巻玉橿磐』（B7・2〈三八六〉）

【書名】外題・内題…神代巻玉橿磐

【形態】写本、冊子、一冊、二五丁

【法量】縦二七・四糎。横一九・八糎。

【識語】神代巻玉橿磐　此編挍藻塩草之次拾藻中瓊説而成故名

【奥書】寛保第三癸亥孟春日　園村浄尚謹拝写

【概要】

神代巻の註釈書であるが、神代上第四段本書で終わっている。奥書によれば園村浄尚なる人物によって寛保三年（一七四三）に写された。なお、筆者は未見であるが無窮会神習文庫所蔵の『古伝口授秘問答』は浄尚の問いに玉木正英の高弟谷川士清が答えた書のようである（『神習文庫書籍目録』無窮会、昭和十年、二六頁）から、両者の師承関係を窺わしめる。

また、同名の書は皇學館大学附属図書館にも所蔵されており、同所所蔵本は神代上第二段本書で終わっている。識語は一致するものの、同所所蔵本の内題には「谷川士清纂」とあり、奥には「村井守章写之」という識語を持つ。村井守章が何者かは定かでないが同所所蔵本、また宮地直一博士旧蔵本を写した園村浄尚との師承関係からして、谷川士清の著作である事は間違いない。識語によれば本書は士清が師正英の亡き後、元文四年に刊行した『神代巻藻塩草』の「瓊説」を基礎としている。その上で士清は北畠親房、忌部正通、一條兼良、山崎闇斎、桑名松雲、松下見林、白井宗因、谷秦山、玉木正英、契沖らの諸説を引いて註釈を施した。本書執筆の時期について松本丘氏は元文元年から同四年、士清二十八から三十一歳の間とされている。

註釈の中では適宜「清謂」・「清按」として自説も記しており、ここでは注目すべきものを何点か紹介しよう。なお、この註釈方法は山崎闇斎による「中臣祓」の註釈書『風水草』に由来する。

①和訓について

真野時縄が「辰爾ハ王仁ノ子也二子和訓ノ祖」云々とするのに対して、士清は「清謂和訓成乎我邦自然文音声王氏父子為以和語訳誦漢字之鼻祖則是謂之和訓之祖謂始者甚非也源親房卿云磐余稚桜朝北平三韓西通呉会爾降使訳往来学校鬱起以為伝未習得聞殊不知我神国本有其訓伝也」と、その説を批判し、北畠親房の説に拠って日本に

は三韓討伐以来、「訓伝」が伝わっているとした。最終的に士清の和訓研究は『倭訓栞』として大成するが、本書からは若き日より抱いていたであろう俗説に対する彼の問題意識を窺わしめる。

②『日本書紀通証』との一致箇所

本書は垂加神道に於ける『日本書紀』註釈の到達点にして、士清畢生の主著『日本書紀通証』とも註釈内容の一致する個所がある。例として神代上第一段第二の一書の記述を左に掲げよう（太字は筆者）。

『玉橿磐』

清聞之**乾道者君道**之謂夫君則天也**道之**本**源出**乎天故乾道**獨化**蓋雖天地既開闢而**天包乎地陽統乎陰**死源乎生悪出乎善**則対待之中**有本末流行之中有首尾是所以君臣分定於天地之初而万古不可易也夫綱常惟源出乎天而統御惟物君耳故天先成而地後定此乃国常立尊之大道所以合陰陽訓君者亦在茲矣夫人莫往而不戴天則雖往夷狄海浜而莫可外君道可以知故逆君者罪不容於天地之間於是乎極矣

『通証』（［　］は割注）

今按乾ノ道者君ノ道也道之大源出二乎天一而統二御シ万民一覆二育シ万類ヲ一独二化乎宇宙之間ニ一此謂二之君道ト一［天包二乎地ヲ一陽統二乎陰ヲ一則対待ノ中有二成而臣道後ニ定一也易ニ曰乾以君トスレ之後漢書ニ曰明主ハ厳ニシ二天元之ヲ尊一正ス二乾剛之位ヲ一礼記ニ曰男先二於女一剛柔之義也天先二乎地ニ一君先二乎臣一其義第一也］

言わんとする主旨は同じうするが『玉橿磐』はやや冗長な感があるのに対し、『通証』はより整然としている。また後者では典拠を明確にしており、より精緻なものとなった。既に松本氏が『通証』に比して『玉橿磐』は引用文献の量が少なく、士清による『日本書紀』研究の片鱗を見せるに止まっている事を指摘されているが、それは右を見ても明らかであろう。

③師説の継承

本書では「師説」に依拠した箇所が見られる。なお、「師説」とは玉木正英の事である。他に「鈴翁」も見えるが、これは士清が学んだ松岡恕庵である。これらの記事から松本氏は士清の師説尊重の態度を指摘されている。そうした記事のうち「又雲洲杵築社紋為亀甲日御崎紋柏葉神也所相境之岩互其紋而各歴然蓋石葉者也則素尊之事亦有不可誣者是先師曽遊出雲以所見予親聞之云」とあるが、これは「先師」正英が出雲へ赴いた際に見聞したものに依拠している。

以上の特徴を有する本書は時期から推定して『日本書紀通証』の前身に位置する註釈書と考えられ、極めて貴重である。

【参考文献】

松本丘「谷川士清の『神代巻玉橿磐』」（『まなびの栞』九、令和二年）

※皇學館大学附属図書館所蔵『神代巻玉橿磐』については皇學館大学松本丘先生より複写を御提供いただいた。記して御礼を申し上げます。

（大貫）

■『諸神本懐』（B7-5〈四二一―一〉）

【書名】外題：諸神本懐

【形態】写本、冊子、一冊、墨付六二丁。

【法量】縦二六・五糎。横一九・二糎。

【概要】

書名は異なるが、天理大学附属天理図書館吉田文庫はじめ各所に所蔵される『諸神根源抄』と同内容である。ただし、例えば吉田文庫本『諸神根源抄』は乾坤の二巻構成であるが、本『諸神本懐』は乾巻（上巻）に該当する部分のみであり、後半の坤巻部分を欠いた零本である。

なお、本書はその末尾に「羽室師貞」と見え、さらにそれに次いで、

上野国
一宮大明神
春名山
白根権現
出羽国
湯殿山　有大石　温湯出
其近辺自温暖

と記して巻を終えるが、これらは『諸神根源抄』諸本にはない記述である。

また、大洲市立図書館矢野玄道文庫にも『諸神本懐』が収められている。この本は一冊本であるが、吉田文庫本『諸神根源抄』の乾坤両巻を収録する完本である。乾巻末相当部に、前述の宮地コレクション本に見られる「羽室師貞」や「上野国‥」が同様に記されており、書写系統を同じくするものと推される。

ちなみに、西田長男氏は、広く流布している『諸社根元記』とその類本について「『諸神根根元記』には異本が少なくない。のみならず、『諸神記』といい、『諸神根源集』といい、『諸神根源抄』といい、『諸神本記』といい、

『諸神本懐』といい、『二十二社註式』といい、はた『諸社并神祇官記』といい…等々…、いずれもこの『諸社根元記』の異本といってよかろう」と指摘しており、ここに言う『諸神本懐』は本書を指しているものと考えられる。

【参考文献】

西田長男「吉田兼敦の延喜式神名帳鈔」（『國學院雑誌』六五―七、一九六四年（のち西田長男『日本神道史研究』第五巻））

新井大祐「中世吉田家における神社研究の系譜についての一考察―吉田兼右『諸神本縁抄』所載「大芋社本縁」を主材として―」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』一八、二〇二四年）

（新井）

■『旧事本紀序段講録』（B7・8〈四六六〉）

【書名】外題…旧事本紀序段講録

【形態】写本、冊子、一冊、五丁

【法量】縦二七・五糎。横二四・四糎。

【奥書】以上丙辰二月二十六日録　奚疑斎謹録

右玉木翁所講説（以下墨消。十二字分程）

謄写之云々元文元五月廿五（以下墨消。七字分程）

【概要】

玉木正英による『先代旧事本紀』序文・「神代本紀」（巻一）の講義録で奥書によれば、元文元年（一七三六）二月二十六日に沢田一斎（別号：奚疑斎）が記録したもので、その三か月後の五月二十六日に写されたものである。

なお、正英は本講義から凡そ五か月後に歿している事から、彼の最晩年に於ける講義録として注目される。加えて、本講義を若林強斎の高弟門人の一人である一斎がこれを記録している事も閑却出来ない。強斎をはじめ望楠軒は、儒学的素養の乏しかった正英をして「学問ノナイ人」（『成斎先生雑話』）と厳しい評価をしていた。そうした中、一斎は望楠軒に於いて弟弟子にあたる竹内式部と共に正英の講義に同席しており、また正英が歿すると式部と共に葬儀にも参列している。本書の奥書は、沢田一斎が柔軟な姿勢で正英の下で学んでいた事を窺わしめるものであり、彼の人物像、学風や思想を見る上で重要であろう。

冒頭では聖徳太子の小伝を論じ、「神代本紀」の講義では「混沌」と「高天原」について、神代巻との伝承の相違などを指摘しながら講じている。講説の多くは続く「神代系紀」が占めているが、そのはじめに「神代系紀ツリノフミトアレハ系図ソ板本ニハ系ガヲチタソ」とあり、元々は系図が附してあった筈であるが、板行された際に落ちてしまった、としている。「板本ニハ」とある事から正英の座右にあった『先代旧事本紀』とは、山崎闇斎も『風水草』執筆に際し用いた寛永二十一年板本であろう。

その上で注意を要するのは、国立国会図書館所蔵の『先代旧事本紀』（寛永板本、以下国会図書館本と略記す）である。正英の講義では聖徳太子の小伝の後、各巻の構成をして、

神皇系図一巻
先代旧事本紀十巻
第一巻云々開闢陰陽二尊ノコトナドヲシルス
第二巻云々日神素尊五男三女素尊ノ悪事等ヲシルス
第三巻云々吾勝尊饒速日ヨリノコトヲシルス

第四巻云々地祇ハクニツヤシロト訓ス素尊根國ヘ下リナサレテ後ノコト大己貴少彦名ノコト

…

とあり、第十巻まで右の如く大意を記している。一方、国会図書館本には書入れがあり、こちらも各巻の大意を記しているのであるが、その内容は以下の通りである（訓点ママ）。

第一巻「記二天地開闢陰陽之事一」

第二巻「記天照太神素戔之誓約五男三四出生及素尊悪事一」

第三巻「記二饒速日尊事一」

第四巻「記二素戔嗚八岐大蛇及大己貴少彦名事一」

また講義では冒頭箇所の「天祖天譲日云々」に対し、『神皇実録』・『天口事書』・『大神宮秘文』を引きながら、それらに見える諸説を論評しているが、国会図書館本もまた同箇所にこれら三冊の引用抜粋の書入れがある。国会図書館本の書入れと正英の講義は一致する箇所が殊の外多い。併せ見ながら検討する事で正英による『先代旧事本紀』の講義模様と本書の価値、さらには国会図書館本の性格をより具体的に明らかに出来るかもしれない。

【参考文献】

西岡和彦「山崎闇斎と『先代旧事本紀』―基礎的考察―」（工藤浩編『先代旧事本紀論　史書・神道書の成立と受容』花鳥社、令和元年所収）

大貫大樹「望楠軒からの「義絶」とその要因」（『竹内式部と宝暦事件』錦正社、令和五年所収）

（大貫）

■『二十二社註式』（B4・9〈一二三六〉）

【書名】外題…二十二社註式 乾坤
内題…坤　二十二社註式 坤
【形態】写本、冊子、一冊、墨付一一八丁。
【法量】縦二四・二糎。横一七・〇糎。
【奥書】此書借索神祇伯雅寿王本
之書写畢
時天保四年秋七月
貫領尚書（印「正房」）

【概要】

乾坤とあるが一冊本で、およそ半分の位置で乾坤に分かれる。

奥書により、天保四年（一八三三）に万里小路正房が、神祇伯・雅寿王の所蔵本を借り受けて書写した本であることが分かる。

現在一般的に『二十二社註式』と称される文献は、早く『群書類従』に収められ、二十二社各社の縁起由緒・祭祀・位記・行幸などについてまとめたものとして知られる。

しかし、本宮地コレクション本はその書名は『二十二社註式』とあるものの、二十二社に留まらず、その他の諸社についても述べており、天理大学附属天理図書館吉田文庫に梵舜自筆本が収められ、その他、本学図書館はじめ各所に伝来する吉田家における諸社研究の成果集成である『諸神記』と同内容である。西田長男氏は『群書解題』「二十二社註式」において「二十二社註式と題するものの中にも（中略）卜部吉田家の諸社根元記（宮地博士所蔵

一本）などをさしているものがあって、群書類従に収められるまでは、必ずしもその書名は一定していなかったようである」と述べている。なお西田氏は『諸社根元記』と内容の似通う『諸神記』などをも「諸社根元記」と称して一括りに論じる傾向があるが、『諸社根元記』と『諸神記』とは条目や本文に出入りがあり、厳密には異なる文献として扱った方が良い。そして、前述の通り本書は『諸神記』の方と重なるものである。以上により、西田氏が述べる「宮地博士所蔵一本」の『二十二社註式』とは、本書を指すものと思しい。

なお、宮地コレクションにはもう一本『二十二社註式』（B4-9〈一二二三〉）を収めるが、こちらは群書類従に収められるものと同じである。

【参考文献】

西田長男「二十二社註式」（『群書解題』一上）
西田長男「吉田兼敦の延喜式神名帳鈔」（『國學院雑誌』六五―七、一九六四年（のち西田長男『日本神道史研究』第五巻））
新井大祐「中世吉田家における神社研究の系譜についての一考察―吉田兼右『諸神本縁抄』所載「大芋社本縁」を主材として―」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』一八、二〇二四年）

※本書の調査・検討に当たっては、高見澤美紀客員研究員（校史・学術資産研究センター）のご助力を得た。記して御礼を述べる。（新井）

■『八神啓白文』（B2-5b〈一六四五〉）

【書名】包紙…八神啓祝文
外題…八神啓白文　兼倶御筆

内題…八神啓白

【形態】写本、折本（三折）、一冊、二紙を接ぐ。

【法量】縦一六・四糎。横六五・〇糎。

【奥書】右神龍院殿 兼倶
御筆也輙莫出門外矣
正二位兼雄

【概要】

近世中期の吉田家当主・吉田兼雄により、父祖で室町期の当主・兼倶（一四三五―一五一一）の真筆とする加証奥書を有する。

神祇官に祀られていた八神（神産日神・高御産日神・玉積産日神・生産日神・足産日神・大宮売神・御食津神・事代主神）の神名を掲げ、それぞれに、その掌るところの神徳を簡潔に記している。

本書は早く西田長男氏によって「吉田神道の成立に就て」に紹介され、同論考には全文の翻刻も収められている。氏はその中で、（一）本書が兼倶真筆であること、（二）兼倶三代前の兼敦による『神祇官八神殿之事秘決』（延喜式神名帳鈔。宮地コレクション収蔵〈一八二八〉）にはすでに本書に見える八神の神徳が掲げられており、本書は兼倶がそれを簡潔にまとめ直したものであること、などを指摘している。

また、氏は本書の詳細な書誌事項を掲げ、その一々が合致するが、ただし法量についての記述は実際のものと誤差がある。

【参考文献】

西田長男「吉田神道の成立に就て」（『千家尊宣先生還暦記念 神道論文集』、一九五八年、神道学会（のち「吉田神道の成立―第二稿―」として西田長男『日本神道史研究』第五巻に所収））

（新井）

■『神祇官八神殿之事秘文』（B1・3e〈一八二八〉）

【書名】包紙…兼―敦朝臣御真筆

神祇官八神殿之事

外題…神祇官八神殿之事秘決

内題…延喜式神名帳鈔

【形態】写本、折本（八折）、一冊、七紙を接ぐ。

【法量】一四・七糎。横二七三・〇糎

【奥書】右兼敦朝臣御真筆也拝見之次而加証明了ト 兼雄

【概要】

近世中期の吉田家当主・兼雄により、南北朝期の当主・兼敦（一三六八―一四〇八）の真筆とする旨の加証奥書を有する。本書は西田長男氏によって「吉田神道の成立に就て」において検討が加えられ、全文翻刻も収めている。氏によれば、包み紙の書題は近世後期の当主・良芳のものといい、外題筆者は不明、本文は他書の兼敦の筆跡に閲して同人のものに違わないとする。外題は「神祇官八神殿之事秘決」といい、内題は「延喜式神名帳鈔」とするが、内容は外題の通り神祇官八神について、その神徳をはじめ、鎮座や位記等について詳細を記す。加えて、西田氏は、

より時代を遡る鎌倉時代の当主・兼夏の記録と思しい「伊大鈔」や、同じく鎌倉期の卜部兼文による「文永勘文」などを引用している点に注目するが、とくに重要な問題として、八神それぞれに神徳が掲げられている点は神道説の一種と言えるものであり、これをもって、すでに兼敦の頃を吉田神道説の萌芽期と見なしうるのではないかとの説を提示している。

なお、氏はその紹介の中で、調査にかかる本書の詳細な書誌事項や加除等に関する事項を掲げ、その一々が合致するが、法量についての記述は実際のものと誤差がある。

【参考文献】

西田長男「吉田神道の成立に就て」（『千家尊宣先生還暦記念 神道論文集』、一九五八年、神道学会（のち「吉田神道の成立―第二稿―」として西田長男『日本神道史研究』第五巻に所収））

西田長男「吉田兼敦の延喜式神名帳鈔」（『國學院雑誌』六五―七、一九六四年（のち西田長男『日本神道史研究』第五巻））

（新井）

■『諸事書抜』（B1-3e〈一八二九〉）

【書名】外題（後補表紙）…兼見卿御筆
諸事書抜
外題（原表紙・題簽）…諸事書抜 兼見

【形態】写本、冊子、一冊、墨付二三丁。

【法量】縦二四・〇糎。横一七・五糎。

【奥書】兼見卿御真筆也
加修補畢
弘化四丁未年十一月十八日
従三位侍従卜部良芳

【概要】

金茶色の後補表紙（表・背）が付され、次いで藍色の原表紙がある。後補表紙背見返しに幕末の吉田家当主・良芳（良熙）により、織豊期の当主である兼見（一五三五―一六一〇）真筆の加証奥書がある。後補表紙の題書も良芳と知られるが、原表紙題簽の題書は未詳。

本文は全編が裏紙に記されているため紙背の裏写りはあるものの、読むに当たってはさほど障害とはならない。内容はその書名に違わず、神祇や吉田神道教理、裁許状・伝授書、その他、雑多な事項が摘記されたものである。

本書については、二〇一二年に東京大学史料編纂所の金子拓氏・遠藤珠紀氏による詳細な調査がなされ、その際、原本の綴じを一旦解き、全紙の表裏両面の調査がなされるとともに、今後の保存のための修補がなされている。その調査結果は、両氏による報告「國學院大學宮地直一コレクション『諸事書抜』・同紙背文書」に詳しく、本文記事及び紙背文書のすべての翻刻が掲載されている。同稿によれば、本書（表本文）の特筆すべき点として、現存する兼見の日記を遡る頃の記録（永禄三年（一五六〇）・同七年）が看取されることや、父・兼右の談話記事などが収載されることが指摘されている。

なお、天理大学附属図書館吉田文庫には同名の書があり、本コレクション本をもとに近世期に吉田兼雄が書写したものである。

【参考文献】
金子拓・遠藤珠紀「國學院大學宮地直一コレクション『諸事書抜』・同紙背文書」（『國學院大學 校史・学術資産研究』七、二〇一五年）。

（新井）

■『神道相傳式　十種神宝　全』（A5・7〈三二四七〉）

【書名】外題…神道相傳式　十種神寶　全

【形態】写本、冊子、一冊、三七丁

【法量】縦二三・五糎。横一六・七糎

【概要】

垂加神道に於ける秘伝伝授に関わる誓約や、神拝次第・各種祝詞・和歌、最後に十種神宝伝を纏めたものである。垂加神道では伝授の階梯を「初重」・「二重」・「三重」・「四重」（極秘伝）としているが、それぞれに求められる誓約の内容、伝授に際し行われる行事を通覧する事が出来る。各種祝詞として「橘家相傳」の「三科祓」があり、或いは「三種大祓」には「讀法口傳」、「玉體安全天上無窮神垂祈禱冥加正直」という「祝詞」には「通用」、「神供祝詞」には「拍手唱之通用」などの注記があって、伝授の方法や垂加神道家が常に唱えていたであろう祝詞の内容、それに伴う作法を窺わしめる。

（大貫）

■『神道秘伝折中俗解』（A5・7〈三二五八〉）

【書名】外題…神道秘伝折中俗解　全

【形態】写本、冊子、一冊、四六丁

【法量】縦二六・六糎。横一九・四糎。

【概要】

林羅山による神代巻研究の成果を纏めたものである。各段は以下の通り。

一　三部本書　二　開闢功神
三　国常立尊　四　天神七代
五　地神五代　六　喜哉
七　宗廟社稷　八　三種神器
九　五行神　十　三部神道
十一　祓除　十二　内清浄外清浄
十三　三種鬼神　十四　天津神籬
十五　天地相玄未遠　十六　海陸不通
十七　本地垂迹　十八　金昆羅神
十九　以淡路島胞　二十　雄詰晴譲
二十一　天鹿児弓天羽々天

神道秘伝折中俗解巻第一

羅山子道春

矢崎浩之氏によれば、同じく羅山が著したもので、林家内部では完成した神道秘伝として伝えられていた『神道伝授』の基礎となったのが本書であった。また、全段を通覧するに、羅山による神代巻講義の内容を写したものであったという。その内容は吉田神道に依拠したもので、文章構成も一条兼良『日本書紀纂疏』、吉田兼倶・清原宣賢『日本書紀神代巻抄』などを下敷きとした箇所が散見される。

しかし、本書は単に吉田の説に対して無批判に依拠してはいなかった、と矢崎氏は指摘されている。実際「三部神道」（「唯一宗源神道　両部集合神道　本迹縁起神道」）を見るに羅山は「右三部神道ハト部家ニシルセル名法要集ニ載テ我家唯一宗源ナリト称スルナリ天下ノ公言ニアラス朝廷ニシロシメス神道ヲハ理當心地ト申ナリコレ則王道神道元来不レ二ッ凡ッ人ノ心ハ神明之舎所也此心ノ中ニアラユル理ヲソナヘタルヲ理當ト云ナリ」とし、吉田家の主張を私事として、飽く迄も朝廷（天皇）が奉ずる「神道」とは「理当心地神道」である、と説く。この講説は林羅山の立場をよく示すものと言ってよい。

【参考文献】

矢崎浩之「林羅山『神道秘伝折中俗解』小考」（『神道宗教』一三三、昭和六十三年）

（大貫）

■『天祖都城辨　火忌説』（A5・8〈三二七二〉）

【書名】外題…天祖都城辨　火忌説　出雲美談神社本

【形態】写本、冊子、一冊、一七丁

【法量】縦二五・五糎。横一八・四糎

【識語】

「天祖都城辨」

明和四丁亥歳冬十月

奄藝　河北景楨識

右以河北氏自筆之謄写畢時

明和六年巳丑春正月　琢斎洞履卿

「火忌説」

明和四年九月朔日

【奥書】文化二乙丑廿八日写之高橋義周

此書妄而、不知神典之旨、所其論説、漢意而已、故本居大人、著書名曰天祖都辨々、盡弁明河北氏之妄、吾徒可見矣、梅舎門人高橋面枝云示、

【概要】

玉木正英・松岡雄淵に学んだ河北景楨の著作。「天祖都城辨」は垂加神道に於ける天上論に基づき、天照大神（「天祖」）の御坐します皇城（「都城」）について論じたものである。その伝来は識語によると景楨より、伊勢内宮の神職で谷川士清の女婿である蓬莱尚憲が写したものである。「火忌説」は伊弉諾尊の火神出生による崩御から火の穢れ、火を忌む淵源について説いている。本書は景楨による二つの論考を合わせて、文化二年に千家俊信の門人高橋義周なる者が写したものである。

このうち前者は垂加神道に於ける基本的な天上（高天原）論を纏めたものとして知られる。垂加神道では山崎闇

斎以来、初代天子を天照大神とし、高天原を大和国高市郡と説いた。景楨もまた「齋部浜成所著神別本紀、曰古昔天照大神生於淡路津那之国、而御宇於豊前那珂津」という『神別本紀』の説（豊前国中津）を批判し、「天照大神在於大倭也、旧説以神代紀有天香山高市」と説いた。かような天上論は、奥書にある如く後に本居宣長から徹底的な批判を受ける事となった。それを纏めたのが『天祖都城辨辨』である。今日「天祖都城辨」の内容は『辨辨』を通じ、容易に見る事が出来るものの、「辨」そのものは多く伝来していない事から、貴重な一冊と言えよう。

（大貫）

【参考文献】

西岡和彦「垂加神道流天孫降臨考」（『藝林』六八―二、令和元年）